



高橋 亨教授 近影

高橋 亨 教授略歴

一九四七年七月九日 神奈川県横浜市生まれ

履 歴

- 一九六六年 三月 愛知県立旭丘高等学校卒業
一九六六年 四月 愛知教育大学教育学部国語科入学
一九七〇年 三月 同上 卒業
一九七〇年 四月 東京大学大学院文学研究科国語国文学専攻修士課程入学
一九七三年 三月 同上 修了
一九七三年 四月 東京大学大学院文学研究科国語国文学専攻博士課程進学
一九七五年 三月 同上 中途退学
一九七五年 四月 名古屋大学教養部専任講師
一九八〇年 七月 名古屋大学教養部助教
一九九〇年 一月 名古屋大学教養部教授
一九九三年一〇月 名古屋大学大学院人間情報学研究科教授
一九九九年 四月 名古屋大学文学部教授
二〇〇〇年 四月 名古屋大学大学院文学研究科教授
二〇一二年 三月 名古屋大学定年退職
二〇一二年 四月 名古屋大学名誉教授

学位

一九七三年三月 文学修士「源氏物語における表現構造と主題」
二〇〇七年五月 博士（文学・東京大学）「源氏物語の詩学」

学会活動

中古文学会（会員および委員・編集委員・常任委員を歴任）

日本文学協会（会員および委員を歴任）

物語研究会（会員）

古代文学研究会（会員および会長も歴任）

各種学内委員

名古屋大学大学院人間情報学研究科社会情報学専攻長

名古屋大学図書館商議員

名古屋大学文学研究科留学生委員

学外委員等の委嘱

大学入試センター国語問題作成委員

科学研究費審査委員

国文学研究資料館文献調査員・共同研究員

国際日本文化研究センター共同研究員

海外出張講義および講演

インディアナ大学比較文学科・東アジア学科客員教授（一九九一年八月～二月）
カレル大学哲学部客員教授（二〇〇四年一月～二〇〇五年一月）
韓国国立木浦大学校講師（二〇〇一年四月）

（十一）講演

一九九五年一〇月二六日 コロンビア大学東アジア学科「物語の話型と心的遠近法」

一九九五年一月一三日 MAI LS（アメリカ中西部日本文学会）秋期大会 ウイスコンシン大学「物語の時空と心的遠近法」

心的遠近法」

一九九五年一月一七日 インディアナ大学ブルーミントン校 「Narrative Structure of Monogatari and

Psycho-perspective」

一九九五年一月二七日 プリンストン大学東アジア学科「物語の時空と心的遠近法」

一九九五年二月 八日 シカゴ大学東アジア学科 「Narrative Paradigms and Psycho-perspective of

Monogatari Fiction」

二〇〇一年 九月一日 吉林大学「源氏物語と日本文化」

二〇〇一年 九月二日 吉林大学「源氏物語の心的遠近法」

二〇〇六年 六月 九日 韓国外国語大学校「紫式部と源氏物語の方法」

二〇〇六年 六月一三日 韓国国立木浦大学校「紫式部と源氏物語の世界」

その他

インディアナ大学・シカゴ大学・ウイスコンシン大学・コロンビア大学・プリンストン大
学・吉林大学・韓国外国語大学・ハイデルベルグ大学等で講演

受賞歴

財団法人日本古典文学会賞（一九七八年）

高橋 亨 教授著述目録

塩村 耕・眞野道子・川辺瑞絵(編)

(一) 単著

『源氏物語の対位法』東京大学出版会、昭和五七年(一九八二)五月(二六七頁)

『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会、昭和六二年(一九八七)一月(三四三頁)

『色』のみの文学と王権―源氏物語の世界へ―新典社、平成二年(一九九〇)一〇月(一四二頁)

『物語と絵の遠近法』べりかん社、平成三年(一九九一)九月(三七一頁)

『源氏物語の詩学―かな物語の生成と心的遠近法』名古屋大学出版会、平成一九年(二〇〇七)九月(七五〇頁)

(二) 共著

『物語の千年『源氏物語』と日本文化』森話社、平成一二年(一九九九)一月小嶋菜温子・土方洋一との共著。(二八三頁)

(三) 編著

日本文学研究資料叢書『源氏物語』四、有精堂、昭和五七年(一九八二)一月(一五五―一六四頁)

『竹取物語 大和物語』ほるぷ出版、昭和六一年(一九八六)九月(三三八頁)

『源氏物語帯木』桜楓社、昭和六二年(一九八七)三月(六五頁)

『源氏物語と帝』森話社、平成一六年(二〇〇四)六月(三三三頁)

『王朝文学と物語絵』(平安文学と隣接諸学一〇)竹林舎、平成二二年(二〇一〇)五月(五四二頁)

『無名草子における引用関連文献の総合的調査と研究』(平成一三―一五年度科学研究費補助金(基盤研究)(C)(二)研究成果報告書)平成一六年(二〇〇四)五月(九二頁)

『日本語テキストの歴史的軌跡 解釈・再コンテキスト化・布置』(「テキスト布置解釈学的研究と教育」第八回国際

研究集会報告書) 名古屋大学大学院文学研究科、平成二三年(二〇一〇)三月(一三七頁)
『(紫式部)と王朝文芸の表現史』森話社、平成二四年(二〇一二)二月(四九七頁)

(四) 共編著

『物語の方法―語りの意味論』世界思想社、平成四年(一九九二)四月、糸井通浩と共編で、第一章「物語文学の語りの方法・序説」のうち、「物語学にむけて―構造と意味の主題的な変換―」(四〇二〇頁)を執筆。

『新講源氏物語を学ぶ人のために』世界思想社、平成七年(一九九五)二月、久保朝孝と共編で、第二章「源氏物語の方法―謎かけの文芸―」(二七〇五二頁)を執筆。

『新編竹取物語』おうふう、平成一五年(二〇〇三)一〇月、関根賢司と共編(一八一頁)。

『武家の文物と源氏物語絵―尾張徳川家伝来品を起点として』翰林書房、平成二四年(二〇一二)四月、久富木原玲・中根千絵と共編で、第二章「源氏物語をめぐる文物の諸相」のうち、「清原雪信の「源氏物語画帖」とその画風」(四〇八〇四三〇頁)を執筆。(四九六頁)

(五) 論文(特記のないものはすべて単著)

「源氏物語における出家と罪と宿世―藤壺物語と王権の喪失・序説―」『むらさき』九、昭和四六年(一九七二)六月、二五〇三五頁、(改訂再録) 日本文学研究資料叢書『源氏物語』四、有精堂、昭和五七年(一九八二)一一月
「夢のような現実感覚」『日本文学』二二一〇、昭和四七年(一九七二)年一〇月

「可能態の物語の構造―六条院物語の反世界―」『日本文学』二二一一〇、昭和四八年(一九七三)一〇月

「源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉―女三宮Ⅱ柏木物語―」『国語と国文学』五〇―一一二、昭和四八年(一九七三)一二月

「男性作品から女の文学へ―物語文学の深化―」『国文学・解釈と鑑賞』三九―一、昭和四九年(一九七四)一月

「物語の発端の表現構造―宇津保から源氏への物語史的過程―」『日本文学』二三一六、昭和四九年(一九七四)六月

- 「若菜上・若菜下」『国文学・解釈と教材の研究』一九一〇、昭和四九年（一九七四）九月
- 「宇治物語時空論」『国語と国文学』五一―一二、昭和四九年（一九七四）二月
- 「紫式部日記」の現在」『国文学・解釈と鑑賞』四〇―四五、昭和五〇年（一九七五）四月
- 「存在感覚の思想―〈浮舟〉について―」『日本文学』二四―三一、昭和五〇年（一九七五）十一月
- 「枕草子鑑賞（第一八二段―第一九二段）」『枕草子とその鑑賞』二、有精堂、昭和五〇年（一九七五）十二月
- 「竹取物語論」『国語と国文学』五三―三三、昭和五一年（一九七六）三月
- 「竹取物語論のための序説」『古代文化』二〇八、昭和五一年（一九七六）五月
- 「五月まつ花橘の変奏譚―歌ことばと物語的想像力―」『古代文学研究』一、昭和五一年（一九七六）八月
- 「堤中納言物語の世界―短編性について―」『堤中納言物語・とりかへばや物語』三谷栄一・今井源衛編、角川書店、昭和五一年（一九七六）十二月
- 「歌ことばと物語的想像力」『国文学・解釈と教材の研究』二二―二一、昭和五二年（一九七七）一月
- 「モノガタリ言語序説―物語史覚え書き―」『名古屋大学教養部紀要』A―二一、昭和五二年（一九七七）三月
- 「物語の〈語り〉と〈書く〉こととは何か―源氏物語の作者の詞―」『国文学・解釈と教材の研究』二二―一一、昭和五二年（一九七七）九月
- 「源氏物語の内なる物語史」『国語と国文学』五四―一一、昭和五二年（一九七七）十一月
- 「源氏物語的時空―その負極―」『日本文学』二六―一一、昭和五二年（一九七七）十一月
- 「物語論の発生としての源氏物語―物語史覚え書き（二）―」『名古屋大学教養部紀要』A―二二、昭和五三年（一九七八）三月
- 「源氏物語の方法・文体〈語り〉の表現構造―いわゆる草子地について―」『源氏物語』下、至文堂、昭和五三年（一九七八）五月
- 「紫式部、自己省察の文体」『国文学・解釈と教材の研究』二三―一九、昭和五三年（一九七八）七月
- 「祭りの幻想と宇津保物語」『古代文学研究』三、昭和五三年（一九七八）八月

- 「喪失と懐古―歌物語のアイロニー―」『国文学・解釈と教材の研究』二四―一、昭和五四年（一九七九）一月
- 「宇津保物語―はじまりの世界の想像力―」論集中古文学二『初期物語文学の意識』笠間書院、昭和五四年（一九七九）五月
- 「狂言綺語の文学―物語精神の基底―」『日本文学』二八―七、昭和五四年（一九七九）七月
- 「柏木はなぜ自ら死を求めねばならなかったのか」『国文学・解釈と教材の研究』二五―六、昭和五五年（一九八〇）五月
- 「藤壺の登場・事件」『国文学・解釈と鑑賞』四五―五、昭和五五年（一九八〇）五月
- 「雨夜の品定め」『国文学・解釈と鑑賞』四五―五、昭和五五年（一九八〇）五月
- 「物語の語り手（一）―帚木三帖の序跋」『講座源氏物語の世界』一、有斐閣、昭和五五年（一九八〇）九月
- 「文学的〈古代〉の可能性」『古代文学研究』五、昭和五五年（一九八〇）九月
- 〈座談会〉「なぜ物語文学を研究するか」三田村雅子・阿部好臣・河添房江・高橋亨、『国文学・解釈と鑑賞』四五―九、昭和五五年（一九八〇）九月
- 「浮舟」―話声の研究（上）「アマンダ・ステインチクム・高橋亨共訳、『日本文学』二九―一〇、昭和五五年（一九八〇）九月
- 「浮舟」―話声の研究（下）「アマンダ・ステインチクム・高橋亨共訳、『日本文学』二九―一〇、昭和五五年（一九八〇）一〇月
- 「光源氏体制の建設」『講座源氏物語の世界』四、有斐閣、昭和五五年（一九八〇）十一月
- 「闇と光の変相」『ユリイカ』二二―一四、昭和五五年（一九八〇）十二月
- 「蜻蛉日記の修辭―引き歌論を中心に―」一冊の講座『蜻蛉日記』有精堂、昭和五六年（一九八一）四月
- 「物語の本文批評について」『日本古典文学会々報』八五、昭和五六年（一九八一）四月
- 「逆曼荼羅の流出―源氏物語の〈語り〉―」『日本文学』三〇―一五、昭和五六年（一九八一）五月
- 「物語の構造分析、その可能性と限界」『国文学・解釈と鑑賞』四六―五、昭和五六年（一九八一）五月

「引用としての准拠―源氏物語における文学と歴史」『平安時代の歴史と文学』文学編、山中裕編、吉川弘文館、昭和五六年（一九八二）十一月

「朱雀院の人間像」『講座源氏物語の世界』六、有斐閣、昭和五六年（一九八二）十二月

「〈語り〉と登場人物」論集中古文学五『源氏物語の人物と構造』笠間書院、昭和五七年（一九八二）五月

「物語の語り手（二）―古御達の語り」『講座源氏物語の世界』七、有斐閣、昭和五七年（一九八二）五月

〈読む〉「〈落窪〉の意味をめぐって―物語テキストの表層と深層―」『日本文学』三二一六、昭和五七年（一九八二）六月

「物語と説話」『伝承文学研究』二七、昭和五七年（一九八二）七月

〈座談会〉「物語・説話と歴史（上）」岩瀬博・高橋亨・服部幸造・伴利昭・福田晃・三浦佑之・美濃部重克・森正人、

『伝承文学研究』二七、昭和五七年（一九八二）七月

「物語のまなざし―源氏物語と平家物語」『UP』一一一八、昭和五七年（一九八二）八月

「紫式部 源氏物語の〈六条御息所〉―高貴さと物の怪と」『国文学・解釈と教材の研究』二七一三、昭和五七年（一九八二）九月

「紫式部源氏物語の〈女三の宮〉―幼女性の罪」『国文学・解釈と教材の研究』二七一三、昭和五七年（一九八二）九月

「モノ化した物語〈作者〉」『国文学・解釈と教材の研究』二七一四、昭和五七年（一九八二）一〇月

「夕顔の巻の表現―テキスト、語り、構造―」『文学』五〇一一、昭和五七年（一九八二）十一月

〈座談会〉「物語・説話と歴史（下）」岩瀬博・高橋亨・服部幸造・伴利昭・福田晃・三浦佑之・美濃部重克・森正人、

『伝承文学研究』二八、昭和五八年（一九八三）一月

「〈制度〉論的状况への発言」『日本文学』三二一二、昭和五八年（一九八三）二月

「歌物語としての伊勢物語―テキストの生成と変換―」一冊の講座『伊勢物語』有精堂、昭和五八年（一九八三）三月

「〈物語〉としての平家物語」『日本文学』三二一四、昭和五八年（一九八三）四月

- 「生成の学としての文学理論」『物語研究』四、昭和五八年（一九八三）四月
- 「大君の結婚拒否」『講座源氏物語の世界』八、有斐閣、昭和五八年（一九八三）六月
- 「唐めいたる須磨」『むらさき』二〇、昭和五八年（一九八三）七月
- 「落窪物語」『体系物語文学史』三、有精堂、昭和五八年（一九八三）七月
- 「宇津保物語」の絵画的世界』『風俗』（日本風俗史学会）二二―三、昭和五八年（一九八三）九月
- 「絵と物語の想像力―宇津保物語の型と表現―」『中古文学』三二、昭和五八年（一九八三）十一月
- 「詩文」（〈特集〉源氏物語をどう読むか―現在から）『国文学・解釈と教材の研究』二八―一六、昭和五八年（一九八三）十二月
- 「座談会 制度と表現」を讀んで』『日本文学』三二―二六、昭和五八年（一九八三）十二月
- 「言の葉をかざれる玉の枝―物語言語の生成―」『国語と国文学』六一―五、昭和五九年（一九八四）五月
- 「物語発生」『王朝文学史』秋山虔編、東京大学出版会、昭和五九年（一九八四）六月
- 「王朝文学と憑霊の系譜―ことばのシャーマニズム―」『国文学・解釈と教材の研究』二九―一〇、昭和五九年（一九八四）八月
- 「歌物語はなぜ一時期の所産でしかなかったのか」『国文学・解釈と教材の研究』二九―一四、昭和五九年（一九八四）十一月
- 「中有の風―引用論の視点から」『国文学・解釈と教材の研究』三〇―一五、昭和六〇年（一九八五）五月
- 「源氏物語から見た竹取物語―長恨歌を媒介として―」『国文学・解釈と教材の研究』三〇―一八、昭和六〇年（一九八五）七月
- 「いろいろのみ」『国文学・解釈と教材の研究』三〇―一〇、昭和六〇年（一九八五）九月
- 「源氏物語の心的遠近法」『物語研究』一、新時代社、昭和六一年（一九八六）四月
- 「成立論の可能性」『国文学・解釈と鑑賞』別冊「源氏物語をどう読むか」、昭和六一年（一九八六）四月
- 「前期物語の話型」『日本文学』三五―五、昭和六一年（一九八六）五月

- 「色このみの文学」古代文学論叢一〇『源氏物語とその周辺の文学 研究と資料』武蔵野書院、昭和六一年（一九八六）五月
- 「日本文学（古典）研究、八五」『文芸年鑑』昭和六一年（一九八六）六月
- 「源氏物語」『卒論・レポートを書く』有精堂、昭和六一年（一九八六）六月
- 「源氏物語以後」『日本文芸史』二古代Ⅱ、河出書房新社、昭和六一年（一九八六）一〇月
- 「竹取物語」境界性と異化のテクスト』『国文学・解釈と教材の研究』三二―三三、昭和六一年（一九八六）一一月
- 「紫式部と紫の上」『UP』一六一―一六二、昭和六二年（一九八七）一月
- 「物語文学の時間」『体系物語文学史』二、有精堂、昭和六二年（一九八七）二月
- 「長編物語の構成力―宇津保物語「初秋」の位相」『日本文学講座』四、大修館、昭和六二年（一九八七）五月
- 「源氏物語テクストの〈文法〉序説」『源氏物語の探求』一二、風間書房、昭和六二年（一九八七）七月
- 「『無名草子』の月―月と日本文学」『高校通信東書国語』二七五、昭和六二年（一九八七）九月
- 「ファンタジーとしてのかぐや姫」『季刊 ichiko』五、昭和六二年（一九八七）一〇月
- 「死と再生―須磨」『国文学・解釈と教材の研究』三二―三三、昭和六二年（一九八七）一一月
- 〈対談〉「枕草子、見えない回路」高橋亨・山口昌男、『国文学・解釈と教材の研究』三三―三五、昭和六三年（一九八八）四月
- 「中心と周縁の文法―源氏物語の心的遠近法」『文学』五六―四、昭和六三年（一九八八）四月
- 「『日本文学講座』を読む五 異化と対立のあやとり遊び―『日本文学講座』方法と視点」について』『日本文学』三七―四、昭和六三年（一九八八）四月
- 「日本文学をめぐって」『日本文学』三七―五、昭和六三年（一九八八）五月
- 「竹取物語 かぐや姫論―変化のもの」別冊国文学三四『竹取物語伊勢物語必携』昭和六三年（一九八八）五月
- 「源氏物語」(古典文学論文・レポート制作マニュアル)『国文学・解釈と教材の研究』三三―九、昭和六三年（一九八八）七月

- 「視線・まなざし・まみ」『物語研究』二、昭和六三年（一九八八）八月
- 「『とりかへばや』物語の倒錯」『国文学・解釈と鑑賞』五三一九、昭和六三年（一九八八）九月
- 「源氏物語の本」（〈特集〉古典文学読書案内）『国文学・解釈と教材の研究』三三一―二、昭和六三年（一九八八）九月
- 「叙事の時間」『国文学・解釈と教材の研究』三四―一、平成元年（一九八九）一月
- 「源氏物語の光と王権」『日本文学』三八―二、平成元年（一九八九）二月
- 「生成するテキストにむけて―小森陽一『構造としての語り』『文体としての物語』を読む」『国語国文研究』八三、平成元年（一九八九）九月
- 「地名散策第十一回 初瀬 こもりくの初瀬・長谷寺」『新日本古典文学大系』二四付録・月報一一、平成元年（一九八九）一月
- 「竹取物語」―月天女の流離と世の結びめ（幻想文学の劇場）―」（〈結合術〉の古典）『国文学・解釈と教材の研究』三四―一五、平成元年（一九八九）十二月
- 「物語会議―語りと物語事典」石井正己・小峯和明・高木史人・高橋亨・藤井貞和、『国文学・解釈と教材の研究』三五―一、平成二年（一九九〇）一月
- 「フィールド・シラネらの物語文学研究」『国文学・解釈と教材の研究』三五―一、平成二年（一九九〇）一月
- 「省筆の文法・余情の美学―源氏物語の心的遠近法」『終わりの美学』国文学研究資料館共同研究報告書、明治書院、平成二年（一九九〇）三月
- 「レトリックとしての王権―源氏物語の帝を中心に」『日本文学』三九―三、平成二年（一九九〇）三月
- 「よ」の時空と生成力―竹取物語を中心に―『日本上代文学論集』塙書房、平成二年（一九九〇）四月
- 「作品の〈解説〉『いかに木を殺すか』―「大いなる女たち」の物語にむけて」『国文学・解釈と教材の研究』三五―八、平成二年（一九九〇）七月
- 「喩としての地名―明石を中心に―」『源氏物語 地名と方法』南波浩編、桜楓社、平成二年（一九九〇）一〇月

- 「物語文学のまなざしと空間 源氏物語の〈かいま見〉」『日本の美学』一六、平成三年（一九九一）三月
- 「〈もどき〉の生成力―日本文化のポリフォニー―」『日本社会の構造と異文化受容システム』（名古屋大学教養部「日本文学特定研究」報告）、平成三年（一九九一）三月
- 「初期物語の遠近法」『日本文学史を読む』二、有精堂、平成三年（一九九一）五月
- 「源氏物語作中人物論事典 柏木」『国文学・解釈と教材の研究』三六一五、平成三年（一九九一）五月
- 「語りの場の表現史と歴史物語」『王朝歴史物語の世界』山中裕編、吉川弘文館、平成三年（一九九一）六月
- 「源氏物語の〈ゆかり〉と〈形代〉―絵と人形と物語の文法―」『日本文学の特質』平川祐弘・鶴田欣也編、明治書院、平成三年（一九九一）七月
- 「光源氏」源氏物語講座二『物語を織りなす人々』勉誠社、平成三年（一九九一）九月
- 「〈話型〉継子譚の構造―実例「落窪物語」」『国文学・解釈と教材の研究』三六一〇、平成三年（一九九一）九月
- 「貴種流離譚の構造」『国文学・解釈と鑑賞』五六―一〇〇、平成三年（一九九一）一〇月
- 「平中物語論―言の葉のうつろい」『平安時代の作家と作品』石川徹編、武蔵野書院、平成四年（一九九二）一月
- 「物語学にむけて―構造と意味の主題的な変換」『物語の方法―語りの意味論』、糸井通浩・高橋亨編、世界思想社、平成四年（一九九二）四月
- 「源氏物語の〈琴〉の音―知の歴史語りの遠近法」『季刊richio』二二二、平成四年（一九九二）四月
- 「物語の時間・絵画の時間」高橋亨・千野香織、『日本の美学』一九、平成四年（一九九二）一二月
- 「ジャンルを越えるレトリック／物語・小説のレトリック」（古典文学レトリック事典）高橋亨他、『国文学・解釈と教材の研究』三七―一五、平成四年（一九九二）一二月
- 「光源氏論―境界性のゆらぎ」『源氏物語作中人物論集』勉誠社、平成五年（一九九三）一月
- 「源氏文化の位相（一）」『日本古典文学会々報』一二三、平成五年（一九九三）一月
- 「日記と源氏物語」物語の内なる表現史』『古記録と日記』下、山中裕編、思文閣出版、平成五年（一九九三）一月
- 「王朝文学の誕生」『源氏物語を読む』山中裕編、吉川弘文館、平成五年（一九九三）三月

- 「作り物語と説話」『説話の講座』六、勉誠社、平成五年（一九九三）三月
- 「竹取物語と漢詩文―月をめぐる―」『国文学・解釈と教材の研究』三八―四、平成五年（一九九三）四月
- 「特集・三島由紀夫―物語るテクスト〈特別企画〉隠された古典―小説にみる物語要素・類型」池田和臣・佐藤深雪・高橋亨・長島弘明・美濃部重克、『国文学・解釈と教材の研究』三八―五、平成五年（一九九三）五月
- 「源氏文化の位相（二）」『日本古典文学会々報』一二四、平成五年（一九九三）七月
- 〈紙上座談会〉「物語というメディア」三谷邦明・藤井貞和・井上真弓・高橋亨、『新物語研究』一、平成五年（一九九三）一〇月
- 『源氏物語』―物語文学を超えて―『時代別：日本文学史事典：中古編』有精堂、平成七年（一九九五）一月
- 「源氏物語と絵画」『国文学・解釈と教材の研究』四〇―三、平成七年（一九九五）二月
- 「源氏物語の方法―謎かけの文芸」『新講源氏物語を学ぶ人のために』久保朝孝・高橋亨編、世界思想社、平成七年（一九九五）二月
- 「物語の型と虚構―源氏物語を中心に―」『講座日本の伝承文学』三、三弥井書店、平成七年（一九九五）一〇月
- 「文芸と絵巻物―表現法の共通性と差異」『絵巻物の鑑賞基礎知識』至文堂、平成七年（一九九五）十一月
- 「〈もどき〉としての枕草子」『国文学・解釈と教材の研究』四一―一、平成八年（一九九六）一月
- 「アメリカの『源氏物語』研究」『源氏研究』一、平成八年（一九九六）四月
- 「歌の技法と物語の技法」『岩波講座 日本文学史』二、岩波書店、平成八年（一九九六）七月
- 「枕草子―つれづれなくさむ草子と日記」『王朝女流日記を学ぶ人のために』久保朝孝編、世界思想社、平成八年（一九九六）八月
- 「Space/Time of Monogatari and Psycho-perspective」Proceedings of the Midwest Association for Japanese Literary Studies, Vol.2, 1996, Summer
- 「物語研究の課題 Q&A 二七」高橋亨・安藤徹・大森純子・塩田公子・高木信、『国文学・解釈と教材の研究』四二―二、平成九年（一九九七）二月

- 「源氏物語、書かれた語り」別冊国文学五〇『新・源氏物語必携』平成九年（一九九七）五月
- 「源氏物語の悲恋―恋する男の夢の浮橋」『悲恋の古典文学』久保朝孝編、世界思想社、平成九年（一九九七）二月
- 「うつほ物語の琴の追跡、音楽の物語」『国文学・解釈と教材の研究』四三二二、平成一〇年（一九九八）二月
- 「『源氏物語』の光と陰」『アジア文化研究所年報』中京女子大学アジア文化研究所、平成一〇年（一九九八）三月
- 〈座談会〉「書物と語り」紅野謙介・阿部泰郎・三谷邦明・阿部好臣・河添房江・高橋亨・鈴木泰恵・野村倫子、『新物語研究』五、平成一〇年（一九九八）三月
- 「『源氏物語』の内なる絵画・絵画論」『国文学・解釈と鑑賞』六三二八、平成一〇年（一九九八）八月
- 「明石入道の物語の心的遠近法」『国語と国文学』七五一一、平成一〇年（一九九八）十一月
- 「源氏物語の待遇表現―その心的遠近法―」『源氏物語研究集成』三、風間書房、平成一〇年（一九九八）十一月
- 「横笛の時空―源氏物語の音楽とその主題的表現」『源氏研究』四、平成一一年（一九九九）四月
- 「物語の老人」(英訳・The Elderly in Mid-Haian Period Japanese Tales)『国際比較シンポジウム「老賢者メルラン、古今東西の老神」報告集』名古屋大学文学部、平成一一年（一九九九）九月
- 「歳時と類聚―平安朝かな文芸の詩学にむけて」『国語と国文学』七六一〇、平成一一年（一九九九）一〇月
- 「語源譚の物語と歌―掛詞の声と文字―」『声と文字 上代文学へのアプローチ』稲岡耕二編、塙書房、平成一一年（一九九九）十一月
- 「源氏物語の「もののけ」と心的遠近法」(〈シンポジウム〉日本における宗教と文学)『国際日本文化研究センター創立10周年記念国際研究集会報告集』平成一一年（一九九九）十一月
- 「日本文学研究の国際化」『日本文学』四九一四、平成一二年（二〇〇〇）四月
- 〈鼎談〉「源氏物語の死と涙」高橋亨・関根賢司・ツバタナ・クリステワ、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』一五、平成一三年（二〇〇一）三月
- 〈シンポジウム〉「二一世紀の源氏物語へ」三谷邦明・高橋亨・小林正明・三田村雅子、『源氏研究』六、平成一三年（二〇〇一）四月

「かな文字生成論―詩的言語の音と文字」『音声と書くこと』（叢書想像する平安文学八）勉誠出版、平成十三年（二〇〇一）五月

「王朝〈女〉文化と『無名草子』」『古代文学研究』（第二次）一〇、平成十三年（二〇〇一）一〇月

「『源氏物語』の歳時意識―物語の〈詩学〉にむけて」『源氏物語研究集成』一〇、風間書房、平成十四年（二〇〇二）六月

「物語作者の日記としての紫式部日記」『紫式部の方法』南波浩編、笠間書院、平成十四年（二〇〇二）十一月

「物語の形態と表現」にむけて（二〇〇二／一二発表）『SITES討議資料』二、平成十五年（二〇〇三）三月

「平安朝物語と日本語の生成」『ユリイカ』三五―七、臨時増刊号・総特集「日本語」、平成十五年（二〇〇三）四月

「『歌語り』と物語ジャンルの生成」『SITES統合テキスト科学研究』一―二、平成十五年（二〇〇三）十二月

「歌合、詩合、和漢朗詠集―和歌の生成と物語」『文字』二、ミネルヴァ書房、平成十六年（二〇〇四）一月

「『無名草子』注釈と資料」解説『無名草子』注釈と資料『無名草子』輪読会編、和泉書院、平成十六年（二〇〇四）二月

「言の葉としてのテキスト」「テキストとその生成」『COE国際シンポジウム（二〇〇三／一）SITES第三回国際研究集会報告書』、平成十六年（二〇〇四）三月

「『無名草子』と歴史物語」『国文論叢』三四、神戸大学文学部国語国文学会、平成十六年（二〇〇四）三月

「無名草子における引用関連文献の総合的調査と研究」『科学研究費研究成果報告書』、平成十六年（二〇〇四）五月

「物語の「みかど」と「天皇」」『源氏物語と帝』高橋亨編、森話社、平成十六年（二〇〇四）六月

「物語テキストにおける作者」『SITES統合テキスト科学研究』二―二、平成十六年（二〇〇四）九月

「翁と姫の知と笑い」『アジア遊学』六八、平成十六年（二〇〇四）一〇月

〈座談会〉「『源氏物語』の十年―ジェンダー・身体・源氏文化」今西祐一郎・高橋亨・三田村雅子・河添房江・松井健児、『源氏研究』一〇、平成十七年（二〇〇五）四月

「愛執の罪―浮舟の還俗と仏教」『源氏物語』宇治十帖の企て』関根賢司編、おうふう、平成十七年（二〇〇五）一二

〈シンポジウム〉「光源氏の罪と栄華」『源氏・賢治・ジュリエット』平成一八年（二〇〇六）六月

〈座談会〉「源氏物語のことはへ」藤原克己・高橋亨・高田祐彦、『文学』七一五、平成一八年（二〇〇六）九月

『花鳥風月』における伊勢・源氏』『描かれた源氏物語』三田村雅子・河添房江編、翰林書房、平成一八年（二〇〇六）一〇月

「中古 王朝物語」『国語と国文学』八四一五、平成一九年（二〇〇七）五月

「〔紫式部〕の身と心の思想・序説」『源氏物語と文学思想 研究と資料』古代文学論叢一七、紫式部学会編、武蔵野書院、平成二〇年（二〇〇八）三月

「〔汚穢〕の言葉」『王朝物語のしくさとことば』糸井通浩・神尾暢子編、清文堂、平成二〇年（二〇〇八）四月

〔再録〕「源氏物語の心的遠近法」『源氏物語と紫式部 資料篇』角川学芸出版、平成二〇年（二〇〇八）七月

「間（インター）テキストとしての古注釈と『源氏物語』研究」『平安文学の古注釈と受容』一、陣野英則・横溝博編、武蔵野書院、平成二〇年（二〇〇八）九月

「主題」論の過去と現在」『テーマで読む源氏物語』一、勉誠出版、平成二〇年（二〇〇八）一〇月

〔再録〕「物語学にむけて―構造と意味の主題的な変換」『テーマで読む源氏物語』一、勉誠出版、平成二〇年（二〇〇八）一〇月

〔再録〕「物語の〈語り〉と〈書く〉こと」『テーマで読む源氏物語』三、勉誠出版、平成二〇年（二〇〇八）一〇月
 「能で見る源氏物語―飛翔する想像力」〔柳沢新治との対談〕『能狂言が見たくなる講座十撰』檜書房、平成二〇年（二〇〇八）一〇月

『狭衣物語』の絵画資料と歌』『広がる奈良絵本・絵巻』石川透編、三弥井書店、平成二〇年（二〇〇八）十一月

「建築と絵からみた源氏物語」司会の記（源氏物語千年記念公開講演会テーマ『源氏物語』の时空―建築史・美術史の視点から）『中古文学』八二、平成二〇年（二〇〇八）十二月

「宇治の大君・中の君をめぐる端役たち―裏の主人公による領導とその限界」『端役で光る源氏物語』久保朝孝・外山

- 敦子編、世界思想社、平成二十二年（二〇〇九）一月
- 「フランクフルト本『源氏狭衣歌合絵巻』について」『国語と国文学』八六一五、平成二十二年（二〇〇九）五月
- 「源氏物語の人物論・表現論を拓く」『源氏物語の歌と人物』池田節子・久富木原玲・小嶋菜温子編、翰林書房、平成二十二年（二〇〇九）五月
- 「〈紫式部〉による『伊勢物語』の引用と変換」『伊勢物語 創造と変容』山本登朗・ジョシユア・モストウ編、和泉書院、平成二十二年（二〇〇九）五月
- 『源氏物語』六条院の女楽をめぐる「『アジア遊学』一二六、平成二十二年（二〇〇九）九月
- 『狭衣物語』の絵画」『狭衣物語全注釈』IV巻二（下）、狭衣物語研究会編、おうふう、平成二十二年（二〇〇九）九月
- 『源氏物語』と後宮文化論のための素描」『源氏物語の展望』六、三弥井書店、平成二十二年（二〇〇九）一〇月
- 「近世初期「源氏絵」と詞書筆者について」（平成二十一年度中古文学会春季大会シンポジウム「源氏物語の絵と注釈」）
- 『中古文学』八四、平成二十二年（二〇〇九）一二月
- 『竹取物語』の〈終わり〉と物語史のはじまり」『国文学・解釈と鑑賞』七五―三、平成二十二年（二〇一〇）三月
- 『源氏物語』解釈と後宮文化の異文化コンテクスト」『Global COE 第八回国際研究集会報告書』名古屋大学大学院文学研究科、平成二十二年（二〇一〇）三月
- 『狭衣物語』現存絵画資料場面一覧」『狭衣物語全注釈』V巻三（上）、狭衣物語研究会編、おうふう、平成二十二年（二〇一〇）一二月
- 「平安朝文学の始発と終焉」『国文学・解釈と鑑賞』七六一八、平成二十三年（二〇一一）八月
- 「〈紫式部〉論への視座―身と心の文芸」『〈紫式部〉と王朝文芸の表現史』森話社、平成二十四年（二〇一二）二月
- 「清原雪信の「源氏物語画帖」とその画風」『武家の文物と源氏物語絵』翰林書房、平成二十四年（二〇一二）三月
- 「十二類歌合絵と詞書の〈もどき〉表現」『文化創造の画像学 日本宗教空間と身体』アジア遊学一五四、勉誠出版、平成二十四年（二〇一二）六月

(六) 書評

- 「伊井春樹編『内閣文庫本細流抄』」「国語と国文学」五二―一一、昭和五〇年（一九七五）年一月
- 「藤井貞和著『深層の古代―文学史的批評』」「国文学・解釈と教材の研究」二三―一一、昭和五三年（一九七八）九月
- 「石川徹著『平安時代物語文学論』を読む」『日本文学』二八一―一〇、昭和五四年（一九七九）年一〇月
- 「古田祐・高杉一郎・武田孝・松永巖共著『源氏物語の英訳の研究』を読んで」『日本文学』二九―一二、昭和五五年（一九八〇）二月
- 「関根賢司著『物語文学論―源氏物語前後』」「国文学・解釈と鑑賞」四六―三、昭和五六年（一九八一）三月
- 「島内景二著『御伽草子の精神史』」「国文学・解釈と教材の研究」三三―一〇、昭和六三年（一九八八）八月
- 「山根有三先生古稀記念会編『日本絵画史の研究』」「国文学・解釈と鑑賞」五五―二、平成二年（一九九〇）二月
- 「上原作和著『光源氏物語の思想史的変貌―〈琴〉のゆくへ』」「日本文学」四四―九、平成七年（一九九五）九月
- 「三田村雅子著『枕草子 表現の論理』」「国文学・解釈と鑑賞」六一―一、平成八年（一九九六）一月
- 「関根英二編『うたの響き・ものがたりの欲望―アメリカから読む日本文学』」「日本文学」四五―一一、平成八年（一九九六）一月
- 「室城秀之著『うつほ物語の表現と論理』」「国語と国文学」七七―四、平成二年（二〇〇〇）四月
- 「ツベタナ・クリステワ著『涙の詩学―王朝文化の詩的言語』」「日本の美学」三三、平成一三年（二〇〇一）一〇月
- 「神田龍身著『源氏物語Ⅱ 性の迷宮へ』」「国文学・解釈と教材の研究」四七―二、平成一四年（二〇〇二）二月
- 「藤井貞和著『平安物語叙述論』―時制論と人称論を中心に」『言語・情報・テキスト』（東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要）九―一、平成一四年（二〇〇二）三月
- 「安田徳子・平野美樹共著『四条宮下野集全釈』」「名古屋大学国語国文学」九一、平成一四年（二〇〇二）一二月
- 「日向一雅著『源氏物語の世界』」「源氏物語―その生活と文化」『古代文学研究』（第二次）一三、平成一六年（二〇〇四）一〇月
- 「河添房江著『源氏物語時空論』」「日本文学」五五―九、平成一八年（二〇〇六）九月

「久保朝孝著『古典解釈の愉悅―平安朝文学論攷』」「国文学研究」一六五、平成二三年（二〇一一）一〇月

(7) 紹介

石川九楊『日本書史』産経新聞、平成一三年（二〇〇一）一〇月二日

(8) その他

『源氏物語ハンドブック』の「女三宮」「柏木」「大夫監」「源氏絵」の四項目の執筆、新書館、平成一二年（一九九六）一〇月

『国文学』「物語研究の課題」の企画編集と、「物語の主人公や脇役とは何か」「物語にとって「始め」と「終り」とは何か」「物語の「語り手」とは何か」「物語は音読されたか」「物語の引用とパロディ・「もどき」とは何か」「物語のナショナルリズムと正典化とは何か」の六項目の執筆、國文學四二二、学燈社、平成一二年（一九九七）二月

秋山虔編『王朝語辞典』の「あた」「いろいろのみ」「うしろみ」「ことば」「すき」「たちばな」「まめ」「やまとゑ」の八項目の執筆、東京大学出版会、平成一二年（二〇〇〇）三月

「鼎談 源氏物語の死と涙」関根賢司、ツベタナ・クリステワとの鼎談、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.15「柏木」、至文堂、平成一三年（二〇〇一）三月

シンポジウム「二一世紀の源氏物語へ」三田村雅子、小林正明、三谷邦明と、『源氏研究』六号、翰林書房、平成一三年（二〇〇一）四月

子安宣邦監修『日本思想史辞典』の「源氏物語」の項目を執筆、ペリかん社、平成一三年（二〇〇一）六月

『源氏物語事典』の「いろいろのみ」「みやび」の二項目を執筆、大和書房、平成一四年（二〇〇二）五月

「王朝物語」国語と国文学、千二号、国語国文学界の展望、平成一九年（二〇〇七）五月

「美濃部さんの人柄と学問」『伝承家文学研究』六〇、平成一三年（二〇一一）八月

『王朝文学文化歴史大事典』の「美術・工芸」分野の「絵画」「唐絵・大和絵」「絵所（画所）・絵師」「屏風絵・障子

繪（襖繪）」「繪合」「繪卷物（繪詞）」「年中行事繪卷」「源氏物語繪卷」「源氏繪」「伊勢物語繪」「歌仙繪」「工芸品」
の十二項目を執筆、笠間書院、平成三三年（二〇一一）一月

講義題目

〈大学院〉

平成十一年度

物語文学研究史

平成十二年度

日本の文芸論

平成十三年度

日本の文芸論

日本文学研究の諸問題

『源氏物語』を読む

伊勢物語の古注釈

『増鏡』を読む

平成十四年度

日本の文芸論

日本文学研究の諸問題

『源氏物語』を読む

『増鏡』を読む

平成十五年度

日本の文芸論

源氏物語研究

『大和物語』を読む

『増鏡』を読む

日本文学研究の方法

平成十六年度

日本の文芸論

平安朝文学研究と文学理論

『無名草子』を読む

『増鏡』を読む

日本文学研究の方法

平成十七年度

日本の文芸論

平安朝文学研究と文学理論

『紫式部日記』を読む

『増鏡』を読む

日本文学研究の方法

平成十八年度

日本の文芸論

平安朝文学研究と文学理論

『枕草子』を読む

日本文学研究の方法

平成十九年度

日本文学研究の方法 (1) (2)

日本の文芸論 (1) (2)

平安朝文学研究と文学理論 (1)

(2)

『紫式部集』を読む (1) (2)

平成二十年度

日本文学研究の方法 (1) (2)

日本の文芸論 (1) (2)

平安朝文学研究と文学理論 (1)

(2)

『紫式部集』を読む (1) (2)

平成二十一年度

日本文学研究の方法 (1) (2)

日本の文芸論 (1) (2)

平安朝文学研究と文学理論 (1)

(2)

『枕草子』を読む (1) (2)

テキスト布置解釈学各論II

平成二十二年度

日本文学研究の方法 (1) (2)

日本の文芸論 (1) (2)

平安朝文学研究と文学理論 (1)

(2)

三十六歌仙を読む (1) (2)

テキスト布置解釈学各論V

平成二十三年度

日本文学研究の方法(1)(2)

日本の文芸論(1)(2)

平安朝文学研究と文学理論(1)

(2)

テキスト布置解釈学各論V

『増鏡』を読む

平成十四年度

日本文学研究の諸問題

『源氏物語』を読む

『増鏡』を読む

『堤中納言物語』研究

平成十五年度

日本文学研究の諸問題

『増鏡』を読む

『大和物語』を読む

平成十六年度

日本文学研究の諸問題

『増鏡』を読む

『無名草子』を読む

平成十七年度

日本文学研究の諸問題

『紫式部日記』を読む

『増鏡』を読む

平成十八年度

日本文学研究の諸問題

『枕草子』を読む

平成十九年度

日本文学研究の諸問題(1)(2)

『紫式部集』を読む(1)(2)

平成二十年度

日本文学研究の諸問題(1)(2)

『紫式部集』を読む(1)(2)

平成二十一年度

日本文学研究の諸問題(1)(2)

『枕草子』を読む(1)(2)

平成二十二年度

日本文学研究の諸問題(1)(2)

三十六歌仙を読む(1)(2)

平成二十三年度

日本文学研究の諸問題(1)(2)

三十六歌仙を読む(1)(2)

テキスト布置解釈学各論V

平成二十三年度

日本文学研究の方法(1)(2)

日本の文芸論(1)(2)

平安朝文学研究と文学理論(1)

(2)

テキスト布置解釈学各論V

〈学部〉

平成十一年度

日本文学研究の諸問題

『源氏物語』を読む

『竹取物語』

平成十二年度

日本文学研究の諸問題

『源氏物語』を読む

紫式部日記

『増鏡』を読む

平成十三年度

日本文学研究の諸問題

『源氏物語』を読む

伊勢物語の古注釈